

【添削課題】

出典…慶應義塾大学・文・00年

解答**問1**

自己と他者の補完性について、筆者は、他者の存在が自己の存在を補完する、と考えている。つまり、共同生活を維持するためには他者の社会的存在が必要だ、という意味ではなく、他者の存在は自己のアイデンティティにとつて不可欠であり、わたしがだれであるかということは、他者との関係の中ではじめて現実化される、と考えているのである。生徒・教師関係や、患者・医師関係は一方的であると考えられているが、生徒がはじめて教師がおり、患者がはじめて医師がいる。いかなる人間関係も、自己は他者の、他者は自己の「定義づけ」を行う、という意味で、相互補完的な関係である、といえるのである。

問2**【文章例①】**

「他者の他者としてのじぶん」とは、他者が自己を定義付ける結果、たとえ憎しみや排除の対象としてでもよいから他人の関心の宛て先になつていているという実感や、他人の意識の中で無視し得ないある場所を占めているという実感がひとの存在証明になる、という状況をいう。そして、他者に認められることが、他者の他者としての自己の存在を認める核となる。

この「他者の他者としてのじぶん」の存在を感じるためには、ある種の隔たり、「間あい」というものを自分と他者の間に介在させねばならない。未知の者どうしなら、あるべき匿名の「無関係」という、間主観的な妥当性を維持した「間あい」がある関係とならなければならない。また、親子の関係であれば、親は無条件に子どもの存在を認める、という関係が妥当な「間あい」となる。

適度な「間あい」の設定に失敗すると、過剰に他者に接近したり、他者との隔たりが極大になつたりする。

【文章例②】

幼児などは大人に構つてもらえない、わざといたずらをしてまで親や大人の注目をひこうとすることがある。つまり、無視されることは叱られることが多い。幼児にとって望ましいことなのである。このように、自分の存在が他人にとってなんらかの意味をもつていること、自分がなんらかの関心の対象になつていていることを実感したいという根強い衝動が人間には存在する。なぜなら、自分が他人の意識のなかで無視し得ないある場所を占めているという「他者の他者としてのじぶん」を実感することで、人間は自分のアイデンティティを確保することができるからである。

だが、他人に認められなければ自己認識が得られないというこの傾向は、ブランド品を身に付けることで人びとの賞賛を得ようとか、破壊的な行動を通じて世間の注目を浴びようとするような、皮相的あるいは反社会的な行為に結びつく場合があることも忘れるべきではない。

解説

1 設問要求

- ① 課題文の内容を十分に把握する。
 - ② そのうえで、問1・問2の問題に答える。
- 問1 自己と他者の補完性について著者はどのように考えているのかについて、三〇〇字以内でまとめる。
- 問2 「他者の他者としてのじぶん」とは何かについて、四〇〇字以内で述べる。

2 課題文の読解

まず、課題文全体の内容を前半・後半部分に分けて概観してみよう。

① 前半（第①～⑤段落）：自己存在を確認するために不可欠な他者の存在

(1) 「じぶんというものの存在をたしかなものとして感じうるには他者の存在を欠くことはできない」

- (a) ここで重要なのは「食料・衣料・家屋・ことば・作法などのように、他人たちとの共同生活を維持するためには、いろいろなもの」とが必要だ、という意味」における「他者の社会的存在」ではない。

- (b) わたしが「だれ」かであるという、その特異性やかけがえのなさを、わたしがみずから感じることのできるその条件にかかるような「他者の存在」のことである。

(2) 「アイデンティティにはかならず他者が必要だ」

↓「アイデンティティ」とは「それによって、この時この場所でも、あの時あの場所でも、過去でも未来でも、自分が同一人物だと感じるところのもの」を指す。

↓他者との関係のなかで初めて現実化される。（→「自他のアイデンティティの『補完性』」）

- (a) 少なくともひとりの他者の世界のなかで、場所を占めたいというのは、普遍的な人間的欲求。
- (b) 各人にとつてはじぶんがだれの他者でありえているのかの感覚が、〈自己〉の同一性感情の核をなす。

(3) 「いかなる人間関係であれ、そこには他者による自己の、自己による他者の『定義づけ』が含まれている」

↓生徒と教師、患者と医師や看護婦、などのように、おたがいの存在が各々の存在の意味づけを行つていているということ。つまり「人間関係」はすべて「相互補完的」なのである。

- (a) 重要なのは、「役柄の同一性」よりも、「端的に『だれ』としての自己の同一性」である。

- ↓このときには、他者となるのは「教師でも医師でもなく、別の『だれ』という存在」である。そうした、社会的役柄をこえて、他者が自分になんらかの関心を持つているということが問題なのである。

(4) 「ひとは、他人のなんらかの関心の宛て先になつていることが必要」

- (a) それは必ずしも「好意的な関心」ではなくてもよい。「求められるということ、見つめられるということ、語りかけられる

ということ、ときには愛情のではなくて憎しみの対象、排除の対象となっているのでもいい。」

(b) そうした、自己の存在証明を他人から得られないとき、ひとはひどく落ち込む。「彼にむかって何かをなんらかの仕方で働きかけてこない他者、彼を誘惑し、強奪し、何かを盗み、窒息させ、食い尽し、なんらかの仕方で彼を破壊しようとしない他者に悩まされる。」そのとき「他者はそこにいるが、彼は他者に対してもそこにはいない」からである。(→他者の関心を得られない場合「自殺」に至ることさえある)。

② 後半(第⑥～⑫段落)：他者の他者としてのじぶんが経験できないとき

(1) 他者への同一化

「他者の他者としてのじぶん」を経験できないとき、すなわち「自己の同一性を得られないとき」、ひとは〈間あい〉を超えて(これは「〈間あい〉がもてない」ということでもある)、「過剰に他者に接近」しようとすることがある。

(a) 他人の生をじぶんの生として生きてしまう「投影的な同一化」

他者の存在でじぶんを満たしてしまおうという「併合的な同一化」

→この両者においては「他者の不在が他者との同一化によって一気に否定される。」他者との〈間あい〉がクッショーンのような弹性をもちえなくなる。(例)駅のプラットフォームで未知の男性に「結婚してください」と話しかけた女性
↓これら二様の同一化は宗教的経験の技法と構造的に類似している。

A 自己を自分自身からできるだけ遠ざける技法(解脱)→「投影的な同一化」に類似

B 自己とは異なるものを(自己の)うちに呼び込む技法(救済)→「併合的な同一化」に類似

→これらの「じぶんを世界の側にすっぽりとゆだねてしまう技法」、「じぶんが世界にそつくり誘拐されてしまう技法」が、宗教的な「超越」という場面ではなく、具体的な他者との水平的な関係の場面に移行してくると、他者への過度の接近として現象しだす。

(2) じぶんを他者として認知してくれるような他者との関係をなんとか仮構しても、自己の存在を確証しようとする「幻想」

「アイデンティティは他者との関係のなかでそのつどあたえられるもの、確証されるものであって、ひとが個としても属性

なのではない。」しかし、「ひとはしばしば、じぶんのアイデンティティを、『所有していたり、失つたと思つたり、捜し求めはじめたりするところの対象物』とかんちがいすることがある。」→「他の人びとは、一種のアイデンティティ用材料一式となる。それらをつなぎ合させて、自分自身の肖像を組み立てる。」（レイン）



他者との隔たりの極大化

↓すれ違いや的外れというかたちで現出。

（例1）母親と子どもの会話の「すれちがい」の例

（例2）父親とのすれ違いによつて、妄想にはまつた青年の例

↓ひとが無意識にとるストラテジー

A 会話において隠れた意味にばかり過剰にこだわることで、意味作用のレヴェルが恣意的に混同され、定義通りの意味やメタファーが理解できなくなる場合。

B メッセージをただ文字どおりに受け取り、言外の意味、裏の意味を一切無視することで、意味作用の多層的なレヴェルを单一の次元に平準化してしまうという場合。

C だんまりを決め込む。つまりコミュニケーションそのもののカット・オフ。

3 答案作成の方針（問1について）

設問は「自己と他者の補完性を著者はどのように考へているのかまとめなさい」というものである。この点については、前半部分に述べられているので、著者の考え方即して整理すればよい。留意すべき点は以下である。

◎「自己と他者の補完性」→(1)自分のアイデンティティは他者との関係のなかではじめて現実化されるということ。

(2)各人にとって自分がだれの他者でありえているかの感覚が、自己の同一性感情の核をなすこと。

(3)重要なのは、医師と患者というような役柄における相互補完性ではなく、別の「だれ」という単独な存在としての他者との補完性であること。

→以上の点に留意した上で、字数内にまとめればよい。

4 答案作成の方針（問2について）

設問の要求は「『他者の他者としてのじぶん』とは何か述べなさい」というものである。設問要求は二通りに解釈できる。課題文を「他者の他者としてのじぶん」というテーマに沿って要約することが求められていると考える方向（【文章例①】）と、「述べなさい」とあることから、課題文の内容を整理するというだけではなく、自分なりの事例を使って、検証・考察していく方向（【文章例②】）である。

◎他者の他者としてのじぶん→(1)端的に「だれ」としての自己の同一性

- (2)他人の意識のなかで無視し得ないある場所を占めているという実感
- (3)他者への同一化によっても、他者との隔たりの極大化によつても得られないもの
- (4)バランスのとれた他者との「間あい」や「応答」からもたらされるもの

↓以上の著者の基本的な視点を踏まえておく。

5 課題文の考察

この課題文を読み取る際に、筆者は単に「不適切な他者との関係を示そうとした」のではないという点に留意してほしい。筆者は、不適切な他者関係のあり方を示すことで、（筆者の考えるところの）望ましい他者関係のあり方を読者に伝えようとしているのである。筆者の記述に基づいて、望ましい他者関係のあり方を整理してみよう（便宜上筆者が肯定的に評価している項目に○、そうではない項目に▲を付記しておく）。

(1) 自己存在の確認に不可欠な他者

○自分自身の特異性とかけがえのなさを、自ら感じることができるために必要不可欠であるような他者

▲共同生活や社会生活を営む上で必要とされる他者

(2) アイデンティティ

◎端的に「だれ」としての自己同一性（社会的役割関係を超えた一個人としての自己同一性と考えてよい）

▲生徒に対する教師、患者に対する医師や看護婦としての同一性のように「相互補完的」かつ「役柄」としての同一性

(3) 他者関係

◎他者の他者としての自分を経験できる→本当の自己同一性が得られる

▲他者の他者としての自分を経験できない→自己の存在証明を得られない

(4) 他者との間あい

◎間主観的な妥当性を有する適切な「他者との間あい」がある→本当の他者関係を得るために不可欠

▲間あいを超えて、他者と同一化を図る→他者への過剰な関心、おせつかい、粘着的接触

▲他人との隔たり（間あい）が極大→他者とのすれ違いや的外れ

(5) 会話

▲会話の隠された意味ばかりを過剰に探る

▲会話の言外の意味を一切無視する

▲だんまり。コミュニケーションのカット・オフ

↓筆者は積極的に明示してはいないが、この三つの「不適切な会話」のあり方を逆に考えれば、望ましい会話もまた、相手の発する言葉との「適切な間あい」が不可欠だということになるだろう。「相手が発する言葉そのものの意味」と「相手の言葉の背後にある言外の意味」とを、適切妥当な間あいで感じ取り応答して行くことが必要なのである。

6 課題文に引用された事例の解釈

課題文のなかには、いくつかの不適切な他者関係の事例が引用されている。ここでは、事例の解釈の一例を挙げておく。

① 駅のプラットフォームで未知の男性にいきなり求婚した女性の例

他者との間あいを超えて一気に他者との同一化を図ろうとする行動の一例として引用されている。通常の間あいを感じ取れる女性ならば、未知の男性に好意を抱いても、知己を得るための行動には出ても突然求婚をすることはない。この女性は、未知の男性にとつての自分がどのような存在なのかも実感できていなかつたのであろう。

② 五歳の息子に対する母親の的外的応答の例

虫を見せようとする息子に、この母親は「清潔なときだけ、お前が好きになる」というメタ・メッセージ（言外の意志表明）を送つている。つまり、「自分はいつでも彼女の息子だ」と、息子に思わせないような言葉を投げかけてしまつてはいる。

③ 父親のメタ・メッセージによって妄想に陥った青年の例

父親のメタ・メッセージ→父親である自分が認めたときだけ、お前は私の息子である。

①自分がそうちしたいときだけ、私はお前の父親になれる。

②息子の解釈→（父親のように自分も）自分は自分がなりたい者になれる。

③右のようなプロセスで青年の妄想が肥大化したのであろう。ここには、現実の父親と息子との間にるべき間あいはない。父親にとつての息子も、青年にとつての父親も、ともに各々の自己イメージを相手に被いかぶせた偽りの姿でしか捉えられていないのである。

T3M
慶大小論文



会員番号	
------	--

氏名	
----	--